

的原理性によりて美的理念そのものの構造に於いて(視覺的自然の光芒に即して直觀されたニムブスなる理念)注目された描寫對象として、中世ニムブスからは區別されてルネッサンス・ニムブスと共に近世ニムブス以外のものではない。聖像を彼岸的な榮光の中に浮ばせた中世ニムブスをそれぞれの作風を自律的方式として産出せる自律的な中世視覺性から、光りの自然の視覺的深奥を凝視して不思議な魔力的な光芒ニムブスの流出の中にキリストを現出せしめたレムブラントの逞しき視覺性への展開は、正に視覺性のそれぞれの美的コスモスに於ける自律的原理性を藝術史的に可能ならしめた中世的遠近法から近世的遠近法への展開である。美的自律性は作風・遠近法の歴史に藝術史的展開をもつのである。(完)

彙報

倫理學研究會

七月十五日(土)午後六時 樂友會館

・沙石集の思想

室川泰一氏

寄贈雜誌

四月號 基督教研究(廿一ノ一)・Tohoku Psychological Folia, Tom XI, 1-2, 建國大學研究院月報・文化・1, 五月號 文化、一橋論叢、法學、回教週報、哲學雜誌(五・六月)

前 號 目 次

支那に於ける文藝復興論と經學	重澤俊郎
美的自律性の藝術史的展開	小川長成
前篇「宗教藝術の美的自律性」	
ヘーゲル哲學の根本問題に就ての省察(完)	田泰治
「現實の論理」第二部	